

三國志

卷の九

三國志

卷の九

吉川英治 著



講談社 版

三國志卷之九

不計復裝

共同製本

十三年二月二十日印刷
二十三年二月二十五日發行

定價七十圓

著者 吉川英治

發行者 東京都文京區音羽町三丁目十九番地
尾張眞之介

印刷者 東京都文京區久堅町百八番地
大橋芳雄

印刷所 東京都文京區久堅町百八番地
共同印刷株式會社

發行所

株式會社 東京都文京區音羽町三丁目十九番地
大日本雄辯會講談社

振替口座 東京三九三〇
電話(33)代表 一三一八番
九段

目次

望蜀の卷

白羽扇

.....

二

黄忠の矢

.....

八

針鼠

.....

三

柳眉劍簪

三

鴛鴦陣

六

朝の月

六

凜々細腰の劍

八

周瑜氣死す

九

文武競春

一〇

荊州往來

三

鳳雛去る

三

醉縣令……………一五

馬騰と一族……………一六

不俱戴天……………一七

渭水を挟んで……………一八

火水木金土……………一九

敵中作敵……………二〇

兵學談議……………二一

八・張松……………二二

孟德新書

二五

西蜀四十一州圖

二六

進軍

二七

鴻門の會に非ず

二八

珠

二九

裝幀 恩地孝四郎

挿繪 矢野知道人

望
蜀
の
卷

白羽扇

四

玄徳、孔明は轡をならべて、雲陵へ入城した。

前の太守劉度は、そのまゝ郡守としてここに置き、子の延は軍に加へて、更に、桂陽（湖南省汝陽の西北）へ進んだ。

桂陽へ攻め寄る日、

『たれがまづ先陣するか』

と、玄徳が諸將を見わたした。

『それがしが！』

と、一人が手を舉げた。とたんにすぐ、張飛もをどり出て、

『願はくは此方を！』

と、希望した。

先に手を擧げたのは趙子龍であつた。孔明は、

『趙雲の答へが少し早かつた。早いほうに命ぜられては』

孔明が、迷つてゐる玄德へさう云つた。ところが、張飛は肯かない。

『返事の早い遅いかで決めるなど、前例がありません。何故、てまへをお用ひなされぬか』

『争ふな』

孔明は、仕方なく前のことばを撤回した。そして、

『さらば、圖をひけ』

と責任をのがれた。

趙雲が『先』といふ字の圖に當つた。張飛の引いたのは『後』とある。

『冥加、冥加』

と趙雲はよろこび勇んだが、張飛は甚だよろこばない。なほまだぐづ／＼云つてゐたが、

『未練といふものだぞ』

と、玄德に叱られて、漸く陣列へすがたを退いた。

趙雲は、手勢三平を申し受けた。孔明から、

『それで足りるか』

「た勇者ではないか」

「その趙雲と、この陳應と、いづれが眞の勇者であるか、篤と見届けてから降参しても遅くはありますまい」

非常な自信である。

太守趙範も、やむなく抗戦と極めた。陳應は四千騎をひつさげて、城外に陣を展ぎ、

「破れるものなら破つてみよ」

と、強烈な抗戦意志を示した。

寄手は近づいた。

兩軍接戦となるや、趙雲子龍は馬躍らせて、敵將陳應に呼びかけ、

「劉皇叔。さきに世を去り給ひし劉表の公子琦君をたすけて、こゝに安民の兵馬をすゝめ給ふ。矛を投げ、城門をひらいて迎へよ」

と云つた。

陳應はあざ笑つて、

「われ／＼が主と仰ぐは、曹丞相よりほかはない。汝等はなぜ許都へ行つて、丞相の御腹でも揃へないか」

と、からかつた。

五

この陳應ちんおうといふ者は、飛叉ひしやと稱しやうする武器を良く使ふ。二股ふたまたの大鎌おほいしやうり槍やりとでも云ふやうな凄すごい打物うちものである。

だが、趙雲てううんに向つては、その大道具しやうぐも兒戯しやうぎに見えた。

馬と馬を駈かけ合せて戦ふこと十數合、もう陳應ちんおうは逃げ出してゐた。

『口ほどでもないやつ』

と、追ひかけると、陳應ちんおうは、何をつと喚こゑいて、飛叉ひしやを投げつけた。趙雲てううんは、それを片手に受けて、

『返すぞ』

と、咄嗟とつさに投げ返した。

陳應ちんおうの馬が、竿立きんたてちになつた。趙雲てううんは猿臂えんびをのばして、その襟えりがみを引つ摑つかみ、陣中へ持ち歸つて訓戒くんがいを與へた。

『およそ喧嘩けんかをするにも、對手を見てするがいろ。汝等なんたの恃たのむ兵力と、劉皇叔りうくわうしやくの精銳せいゑいとは、ち

やうど今日のおれと貴様との闘ひみたいなものだ。今日のところは、放してやるから、城中へ戻つて、よく太守趙範にも告げるがいい。何も求めて滅亡するにはあたるまい』

と陳應は野鼠のやうに城へ逃げ歸つた。

太守の趙範は、

『それ見たことか』

と、初めに強がつた陳應を却つて憎み、城外へ追出してしまつた後、あらためて趙雲子龍へ、降参を申入れた。

趙雲は満足して、この從順な降將へ、上賓の禮を與へ、更に酒など出してもてなした。

趙範は、途方もなく喜悅して、

『將軍とてまへとは、同じ趙氏ですな。同姓であるからには、先祖はきつと一家の者だつたにちがひない。どうか長く一族の好誼をむすんで下さい』

と、兄弟の盃を乞ひ、なほ生れ年をたづねたりした。

生れた年月を繰つてみると、趙雲のはうが四ヶ月ほど早く生れてゐる。趙範は額を叩いて、

『ぢやあ、貴方が兄だ』

と、もう獨り極に決めて、嬉しい盡むに包まれたやうな顔して歸つた。

次の日、書簡が來た。

實に美辭麗句で埋つてゐる。

そんな物をよこさなくても、趙雲てううんは堂々入城する豫定であつたから、部下五十餘騎を引率して、城内へ向つた。

許都きよと、襄陽じやうやう、吳市ごしなどから較べれば、比較にならないほど規模きぼの小さい地方の一城市だが、それでもこの日は、郡中の百姓みな香を焚たいて辻に出迎へ、商戸や邸門はすべて道を掃はいてゐた。城に入ると、趙雲はすぐ、

『四門に札を揚げろ』

と命じた。

四民に對して、政令を示すことだつた。これは、一城市せんりやうを占領すると、例外なく行はれることである。

終ると、趙範てうはんは、自ら迎へて、彼を招宴せうえんの席に導みちびいた。

そこで降參かうさんの城將じやうしやうが、この後の從順じうじゆんを誓ふ。

趙子龍てうしりゆうは大いに酔つた。

『席を更へませう。興も草あらたまりますから』



後堂へ請じて、また佳有芳鑑をならべた。後堂の客は、家庭の客である。下へも措かないもてなしとはこの事だつた。

だいぶ酩酊して、

『もう歸る』

と、趙子龍が云ひ出した頃である。まあ／＼と引止めてゐるところへ、ぷーんと、異薫が流れて來た。

『おや？』

と、趙子龍が振向いてみると、雪のやうな素絹を纏つた美人が楚々として來て、

『お呼び遊ばしましたか』

と、趙範へ云つた。

趙範はうなづいて、

『あゝ。こちらは、子龍將軍でいらつしやる。しかもわが家と同じ趙姓だ。お昵懇をねがつて、何かとおもてなしするがいゝ』

と、席へ倚らせた。

趙子龍は改まつて、